

## 平成16年度富山県環境審議会水環境専門部会 議事録

「平成17年度公共用水域及び地下水の水質測定計画」については事務局の原案に異議ない旨、決議された。

なお、この決議については、今後、答申の手続きがとられるとともに、来る3月29日に開催される環境審議会において報告される予定である。

### 議題1 平成17年度公共用水域及び地下水の水質測定計画について（審議）

事務局が平成17年度公共用水域及び地下水の水質測定計画案を説明した後、質疑応答が行われ、原案に異議ない旨、決議された。

[主な発言]

（委員）

・亜鉛の影響は、どんなことが考えられるか。また、県内の排出源は、こういったものを想定しているのか。

（事務局）

・県内の発生源については、産業廃棄物から金属を回収している工場などが考えられ、現在、排水濃度は環境基準の約10倍程度以下である。

また、水生生物の亜鉛の影響について環境省では、餌となる生物や魚介類等の生育に影響を及ぼすとしおり、水生生物の生息状況を踏まえて類型を当てはめていかなければならないと考えている。

（委員）

・地下水の調査の4km内を2kmに区分して4年間で調査を実施しているという説明であったが、その調査地点は固定しているのか。

（事務局）

・現在、固定して調査を実施している。しかし、4年ごとの調査であることから、4年後には調査井戸を廃止している地点もあるので、その場合は、新しい地点を選定している。

（委員）

・その場合は、なるべく近い地点で、長期変化をみられるようにした方がよい。

（事務局）

・そのとおり実施する。

（委員）

・環境の調査を実施していくときに、水生生物について言及したことは非常に意味がある。

亜鉛等の生態への影響の調査はどこが実施しているのか。今までのデータはどこにあるのか教えて欲しい。

（事務局）

・県のデータはないが、亜鉛については、国の調査機関が長年に渡って調査を実施しているところである。環境基準は、十分に安全率をみて設定されているが、新しい基準であるため、国が指針やマニュアルを作成して都道府県に通知するというところになっている。

(委員)

・ダイオキシン類については、底質との関係があると思うが、水質と底質のデータとをつき合わせなどを行っているのかどうか教えて欲しい。

(事務局)

・一般論では、河川の特長もあるが、若干SSとの相関があると考えている。

なお、富岩運河の復元の関係では、国へ重要要望も行っており、環境省の関係では、底質のダイオキシン類の簡易的測定方法について開発中であり、今年度中には目途がつく予定である。

国土交通省では、安価で確実な無害化処理方法について検討しており、両省ともに富岩運河をフィールドとして検討されており、その結果を待ちたいと考えている。

(委員)

・17年度ではないが、ウランの測定が入っている。この背景としては、国が指定しているからと思うが、県としてはどう考えているのか。

(事務局)

・国で要監視項目として指定されたことから、一度は調査を実施したいと考えている。追加項目については、まず県内の使用実績をみて優先的に実施していこうと考えており、ウランは少し後になるが、国で指定されたものについては、1回は実施していくスタンスである。

(委員)

・県として、県内の河川において、亜鉛の水生生物への影響を調査する予定はないと考えてよいのか。全亜鉛の濃度は、県内の河川で、0.03mg/L以下と考えてよいのか。

(事務局)

・現在、水生生物への影響を調査する予定はなく、全亜鉛の実態調査のみを行っている。また、正確ではないが、全亜鉛の濃度について、一部の河川で超えている可能性がある。  
・根底には、排水基準の設定に応じて対応するとの考え方もあるが、環境基準が十分に安全性をみて設定されているため、全国的にみても非常に難しい基準であるというのが現実である。

このため、1回、亜鉛の排出実態を調査し、その後に排水基準等の絡みを踏まえ、必要に応じ国立環境研究所や国と協議していきたい。

(委員)

・15年度の水質汚濁の現況をみると、亜鉛の定量下限値は0.5mg/lとなっている。今度の基準は厳しいので、濃縮して分析することとなると思うが、今後、特殊項目として実施する場合も濃縮して実施するのか。

(事務局)

・そのとおりである。

なお、亜鉛については、16年度から定量下限値を下げた調査を実施している。

## 議題2 15年度の水質汚濁の現況について（報告）

事務局が資料2を説明した後、質疑応答が行われた。

[主な発言]

（委員）

・窒素、りんの測定結果をみると、水質環境目標を超えているが、政策的に将来どうしていくのか。

（事務局）

・そういった状況にもあることから、海上保安庁と連携して汚濁メカニズムについて調査し、さらにレベルアップしたシミュレーションモデルを新たに構築していきたいと考えている。

（委員）

・排出負荷量で生活系があまり改善されていない。下水道が繋がって排水量が増えたためと思うが、今後の見通しはどうなっているのか。

（事務局）

・表で、生活系負荷量が減少していないのは、下水道の整備により排水量が増加したためである。

下水道からの排水については、国土交通省の方針もあって、できるだけきれいになるように取り組んでいきたいという話は聞いており、運転状況を改善し、処理施設の運転の仕方を変えていきたいということも聞いている。

県としても、昨年度から水質改善のための協議会をつくり、工場・事業場から事例発表を通して、研鑽し、下水道にもその事例をみていただいて、取り組んでいただきたいと考えている。

## 議題3 富山湾共同環境調査について（報告）

事務局が資料3を説明した後、質疑応答が行われた。

[主な発言]

（委員）

・今年の計画で富山湾全域に調査を拡大する計画であるが、もう少し詳しく聞きたい。富山湾水質保全研究会の時にも話題になったが、河口域において河川経由で流入する負荷がどちらの方に流れるか、どのように拡散するかが問題となる。そのためにも、富山湾全体の流動がどうなっているか、特に海水交換がどうなっているか分からないといけない。できれば湾のだいぶ沖の方で調査を実施すればいいと思うが、そのあたりを含めて詳しく教えて欲しい。

（事務局）

・全域については、第九管区海上保安本部からいただいている案では、能登半島の先端から新潟県境を結ぶ線の範囲で70地点程度実施することになっている。

（委員）

・来年度の富山湾全域の調査は、季節的にはどのように行うのか。

(事務局)

・夏頃に1回実施する。

(委員)

・季節変化がわからないことになるのではないかと。予算の関係もあると思うが、そのあたりの事務  
局の考えを聞かせて欲しい。

(事務局)

・海上保安庁の船を使用していることから、船が使用できるスケジュールと予算の関係があるので、今の段階では1回しかできないと聞いている。

・調査地点の設定については、京都大学の先生とも相談し進めており、潮流のデータを補完する意味で水産試験場にもデータもあり、NPECにおいても富山湾において定性的な調査を実施しており、また、商船高専などにもデータがあると思うので、全部、組み合わせて、データ交換を行うことにしている。これらの機関と情報交換しながら、専門家を集めて検討して結果をまとめていきたいと考えている。

(委員)

・海流モデルと水質モデルを作るのが目的としているが、小矢部川、神通川の河口の海域を調べるということで始められているが、他の河川についても考えないと、モデルを作るのは難しいのではないかと。そのあたりはどう考えているのか。

(事務局)

・この調査のほかに、海上保安庁では、小矢部川、神通川以外の河口海域についても流れの調査を実施していると聞いており、その調査結果も活用するなど、なるべく使えるものは使っていくという方針で考えている。

そのあたりを含めて、来年度の検討会で学識者の意見を聞きながら、どの様に取り入れることができるか検討していきたい。

(委員)

・窒素、リンの負荷で下水道からの負荷が多い。直接、海にでているものの追跡も重要ではないか。

(事務局)

・確かにそうである。富山県の下水道普及率は70%近くであり、地方都市としては、整備が進んでいる。全体の窒素、リンの負荷量をマクロ的に考えると、下水道が整備されていない時代は、河川や田畑の用水が汚れ、土壌のバクテリアの作用で良くなっているものもあるが、晴天時にはストックされて、雨天時に一時的に流出するということがあった。

下水道の整備が進むことにより、河川からの流出率、流達率が違ってくることは考えられる。河川がきれいになって、海への直接の影響が若干あると思われるが、富山県の場合は、他の地方都市と比べて、整備率が70%に達していることから、この後、負荷が増えても僅かではないかと思う。

現在、国土交通省の方で、地方都市の高次処理のあり方について検討中であり、県でも新年度から雨水等がたくさん入ると処理効率に影響があることから、地下浸透させて、処理効率

を上げるとともに、富山県の地下水を守っていこうという基本計画があり、そのあたりからも下水道からの負荷をなんとか抑えていこうと思っている。